Osaka University Knowledge Archive

Title	台湾に残存する日本語の実態
Author(s)	簡, 月真
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44754
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【32】

氏　　名	簡（カン）　月（ゲッ）　真（シン）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　１８３１７　号
学位授与年月日	平成 16 年３月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**台湾に残存する日本語の実態**
論文審査委員	（主査） 助教授　渋谷　勝己 （副査） 教　授　真田　信治　　教　授　土岐　　哲

論文内容の要旨

本論文は、台湾東部花蓮県をフィールドにして、日本による植民地統治のあと日本社会との交流が半世紀以上にわたって絶たれたにもかかわらず、台湾の高齢者層の人々によって今でも日常語として使用されることのある日本語を対象に、４つの言語項目を取り上げて、その言語的特徴を詳細に記述することを試みたものである。導入部分としての第１部と、個別的な分析を行った第２部からなり、末尾に資料として、談話データ（テキスト）と、本文で取り上げられた４項目以外の言語項目の簡単な使用実態を掲載する。

第１部は３章よりなる。第１章では、1895 年の日清講和条約以降、第二次世界大戦が終結するまでの台湾における日本語の普及過程と在台日本人の社会言語的状況、また現在の台湾におけるリンガフランカとしての日本語の使用状況が整理される。続く第２章では、本論が分析対象とする台湾の日本語にアプローチするための２つの視点、すなわち「（第二）言語消滅」の視点と「バリエーション」の視点を採用して行われた先行研究をそれぞれ概観し、その２つの視点を統合しつつ本論の立場を明確にする。第３章では、調査の概要および本論文の対象とする８名のインフォーマントの属性がまとめられている。

第２部は５章よりなる。日本語がリンガフランカとして同じ非母語話者相手に用いられた場面（以下 LF ドメイン）と、日本語母語話者相手に用いられた場面（以下 NS ドメイン）の、２つの場面で得られた自然談話データを主な分析対象とし、さらに、戦前戦中にわたって多数を占めた西日本（本論文では高知県）出身者の方言談話データをベースラインとして採用することによって、台湾日本語のもつ独自の特徴を鮮明に描き出している。ここで取り上げられた言語項目は丁寧体・可能表現・否定辞・一人称代名詞の４つで、接触言語学的に見てそれぞれがひとつの残存類型を構成する。

第４章では、義務的な文法カテゴリである丁寧体・普通体の使用実態を取り上げ、LF ドメインでは全員普通体をほぼ専用しているが、NS ドメインになると丁寧体への切換えが現れること、ただし日本語能力の低い話者にはその切換えが見られないこと、また丁寧体への切換えを行ったインフォーマントの中にも従属節に丁寧体が使えない話者がおり、８名の話者の丁寧体使用能力に応じた連続体が見られることなどが明らかにされている。

複数の形式がひとつの表現領域を構成する可能表現を取り上げた第５章では、-rareru、-eru が後接する派生動詞の形式とデキル系統の形式の両者が用いられているものの、LF ドメインでは可能であることだけをデキルで述べて具体的な動作を明示しない「デキルの汎用」が多く観察されること、日本語能力の高い話者は NS ドメインで「デキ

ルの汎用」をしないように切換えることができるが日本語能力の低い話者にはそれができないこと、また日本語能力の低い話者は「動詞ル形＋デキル」（食ベルデキルなど）のような形式を作り出し、ドメインにかかわらず用いていることなどを見出している。

方言が関与する言語項目である否定辞を分析した第６章では、否定辞ンとナイが競り合った結果、ンが一段・カ変・サ変動詞から先に消滅して五段動詞にだけ残っていること、五段動詞の中では特にラ行のそれに使われやすいこと、ンの衰退には後接する要素の予測性や拍数といった言語内的制約条件が関与していることなどを指摘している。

日本語のほかに閩南語の形式が使用される一人称代名詞を取り上げた第７章では、使用率の差こそあれ、すべての話者が LF ドメインで閩南語一人称代名詞を用いていること、NS ドメインになると日本語能力の高い話者は閩南語一人称代名詞を日本語一人称代名詞に切換えることができるが、日本語能力の低い話者にはそれができないこと、閩南語人称詞の使用は連体修飾の場合に現れやすい傾向があることなどが見出された。

最後の第８章では、以上の個別の分析を総合し、言語構造の単純化と単一スタイル化という観点から台湾日本語の特徴をまとめている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、話者数、使用場面いずれも減少しつつあり、記録・記述することの急がれる台湾の高齢者層に使用される日本語を対象として、丁寧体・可能表現・否定辞・一人称代名詞の４つの言語項目を詳細に記述することを試みたものである。これまでの研究には、台湾に残存する日本語の特徴をエピソード風に羅列したものはいくつかあるが、個々の言語項目を包括的にかつ深く分析したものはほとんどない。本論文は、取り上げた４つの言語項目をそれぞれ詳細に分析して、母語話者の話す日本語と比較したときの台湾日本語の単純化の諸相、たとえば困難な形態処理の回避、バリアントの減少、分析的構造の多用、文脈依存の汎用形式の使用、単純な体系の採用といった特徴を明らかにしている。また、50 年にわたっての第二言語の維持、LF ドメインと NS ドメインの２つの談話データを対照しての分析といった視点や手法は、これまでの接触言語学の領域では先行研究がほとんどなく、きわめて斬新である。言語構造の単純化と単一スタイル化といった視点が一貫しているために、論文としてのまとまりにも優れている。

ただし、いくつかの問題点がないわけではない。たとえば８名の話者の総合的な日本語能力を最初に判断し、その能力の違いによってインフォーマント間の言語構造の単純化のありかたの違いを説明しているが、その日本語能力の判断がどのようになされたのか、必ずしも明確ではない。また、個々のインフォーマントの上記総合的な日本語能力と実際に観察される言語構造・スタイル面での単純化のありかたを相関させ、能力の高い話者と低い話者のもつ台湾日本語の特徴の違いを当該言語の消滅プロセスとして解釈し、その消滅のプロセスを推定しているが、そのような個人間の共時的バリエーションを通時的消滅過程と読みかえる理論的根拠はまだ十分に確立しているわけではない。

このようにいくつかの問題点は残されているが、これらはむしろ、今後の発展のための課題として捉えられるべき性質のものであって、台湾日本語の詳細な記述をめざした本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって本論文は、博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。